

カトリック香里教会 四旬節第五主日 2022年4月3日

— イザヤ43章・16-21、フィリピ3・8-14、ヨハネ8章・1-11—

(イエスは)座って教え始められた。そこへ、律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、イエスに言った。「先生、この女は姦通をしているときに捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうかお考えになりますか。」イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである。イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き始められた。しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたたちの中で罪を犯したことはない者が、まず、この女に石を投げなさい。」そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた。これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真ん中にいた女が残った。イエスは、身を起こして言われた。「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか。」女が、「主よ、だれも」と言うと、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」— ルカ 15 章—

愛のゆるし

親は子供を見捨てません。動物でさえ、閉じ込められた子どもを救出しようとして崩れた瓦礫を必死に掘っている母犬を、テレビのシーンで見かけました。一度、神に救出されながら、その神を離れて国を滅ぼし、バビロンの捕囚の身となった民の救出を、神は再び企てます。第一の救出は、水の中を通して。第二の救出は捕囚の身となって涙で越えた荒れ野の道を、意気揚々と帰らせて。

このように、不忠実な罪が許され、助け出されたイスラエルの民、その指導者が今、一人の「罪の女」をイエスの前に引き立てて、神を律法の下に貶めることになることも知らずに、イエスを試みているのです。この罪人は、律法によれば、石殺しの刑に処せられることになっており、それ故、彼女を許せば律法を犯すことになり、死刑だと言えばローマの主権を犯す者となって裁かれることになるのです。イエスは、誰も彼女に手を下せない方法を取りました。

善いお方は、神お一人です。 裁きは、神のものであり、本来、私たち罪びとが罪人を裁くことは出来ないのです。神が私たちの罪を赦して下さっているように、私たちは人を赦さなければなりません。しかし自己中心的な人間に人を許すことは不可能です。 赦しは「愛の業」であり、愛がそれを可能にします。「愛は神から来る」からです。神を身に受けた人は、愛に満たされて、罪の生活に意味を持たなくなります。神の愛がその人を神に、あこがれ向かわせるからです。

かつて、アフリカのルアンダに於けるジェノサイドで、家族を皆殺しにされた少女イマキュレーが、その殺人者の前で思いのたけを述べたのは「あなたをゆるします」の一言でした。彼女は、3か月間かくまわれていた1m四方のトイレの中で祈ったロザリオで、神の恵みを受けた人でした。

ある死刑囚を訪ねた教誨師の話。二人を殺めて受けた宣告は当然の報いであり、罪が許されることはあり得ないと信じていた死刑囚が、神はこの罪を許すと知って教誨師を依頼してきたというニュースを友人の神父から耳にして、心が癒される思いがしている私です。



誰も手を出せなかった罪人は、その後、イエスのとりことなり、復活のイエスに出会う恵みに預かる者とされたのです。

2022年4月3日 主任司祭 昌川 信雄